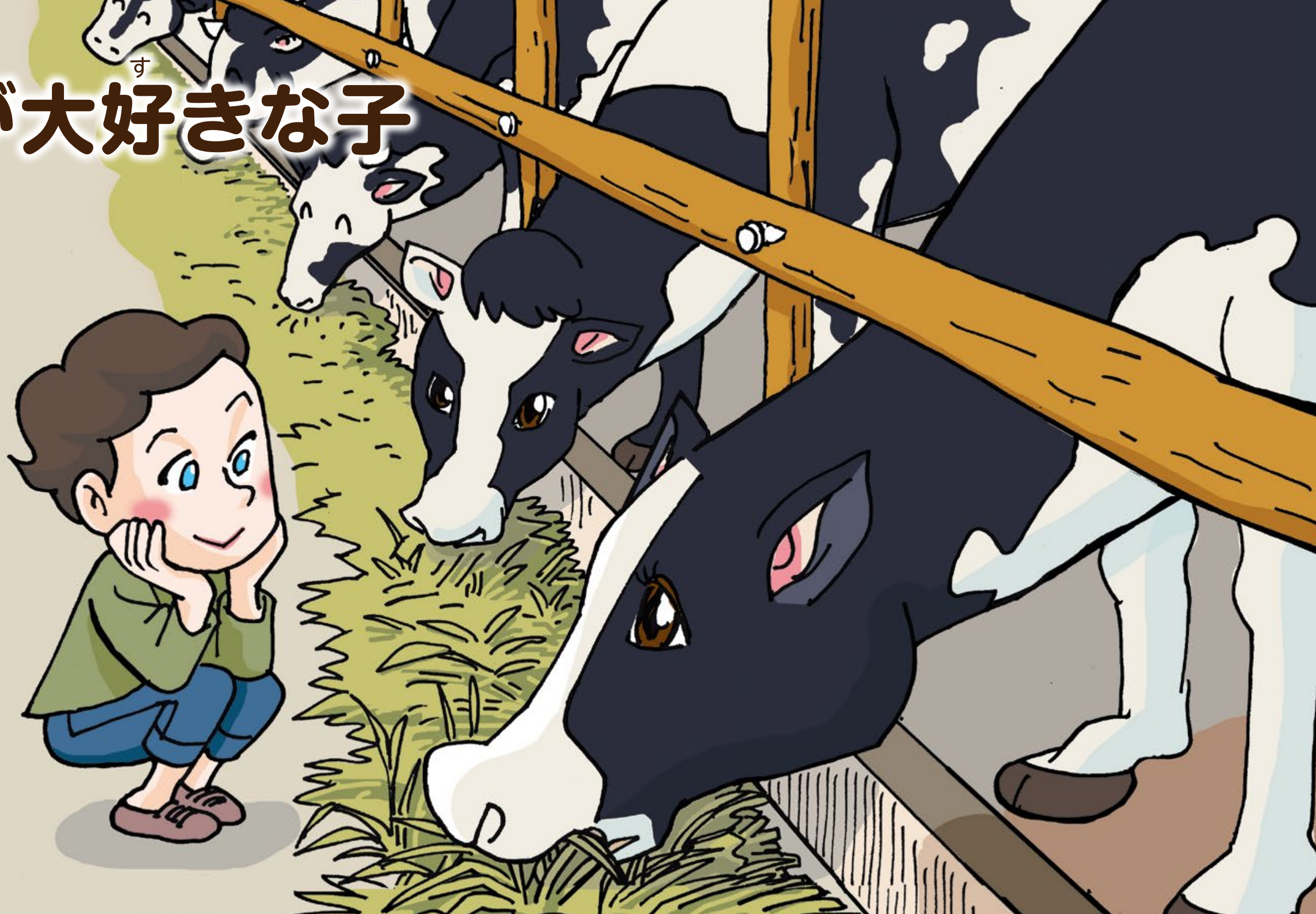


どうぶつ
動物が大好きな子



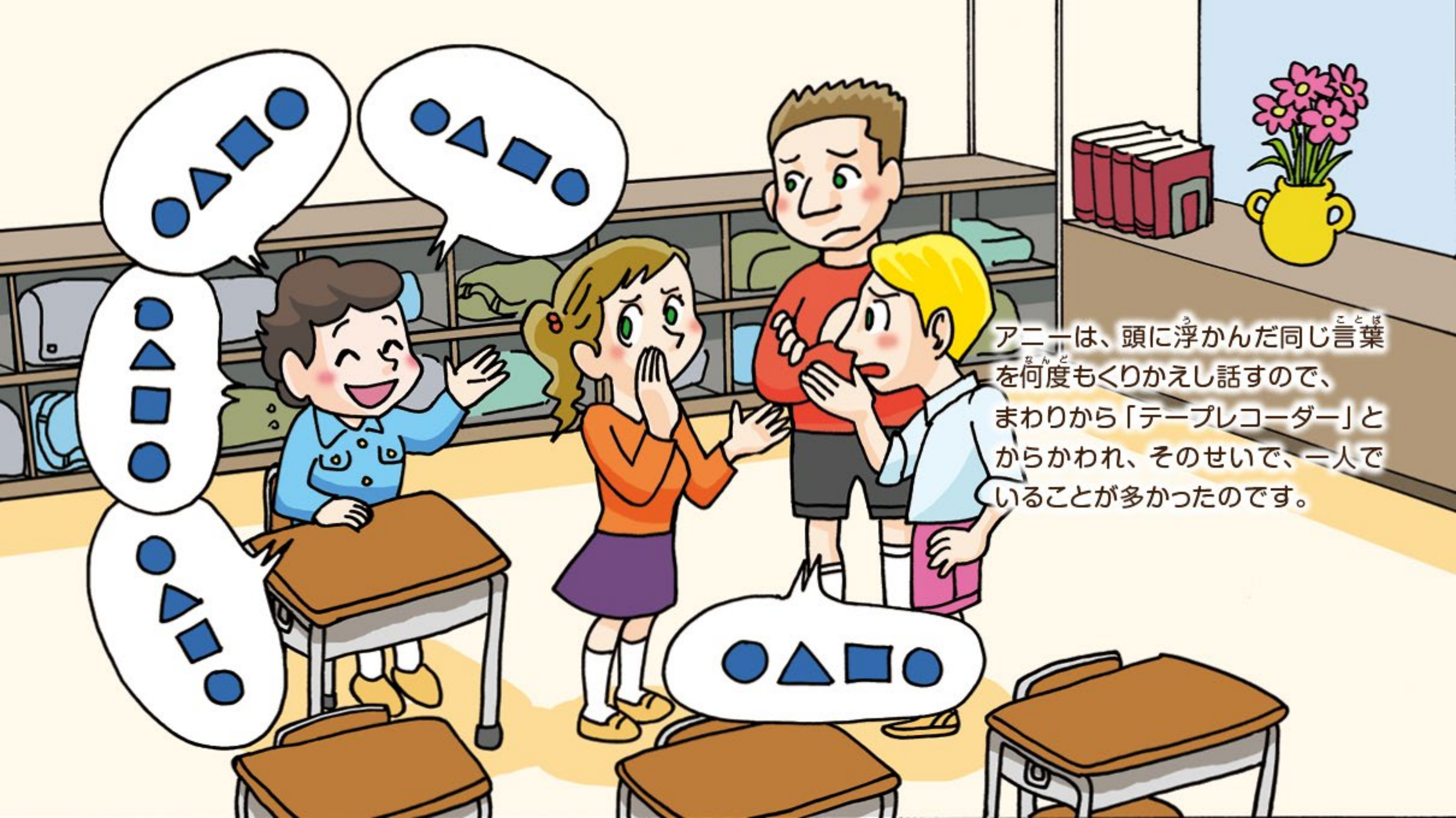


アニーは、動物を^{どうぶつ}観察^{かんさつ}するのが好きで、
いつも一人^{ひとり}でいる女の子です。

アニーの脳には、
自閉症という障がいがありました。
その中でも、学力の高い高機能自閉症でした。



アニーのお母さんは、「みんなと同じ学校に通ってほしい」と、普通の学校に通わせたのですが、アニーは学校で、いつもひとりぼっちでした。



アニーは、頭に浮かんだ同じ言葉
を何度もくりかえし話すので、
まわりから「テープレコーダー」と
からかわれ、そのせいで、一人で
いることが多かったのです。

そんなアニーにも、とても大切な友だちがいました。
それは、犬や、馬や、牛たちです。
アニーは動物たちといっしょにすることが楽しくて、
一日中いっしょに遊んでいました。

ある日、アニーがいつまで
たっても家に帰ってこないの
で、お母さんは心配になり、
探しにでかけました。
でも、アニーはなかなか見つ
かりません。

やっと見つけたとき、アニー
は、まっ暗な場所で、牛が草
を食べているのを、じーっと
見つめていました。





やがて、アニーは高校生になり、ある先生に出会います。ダニエル先生という、科学の先生です。

先生は、アニーが科学の実験のときに、とても集中して観察していることにおどろき、アニーの持つすばらしい才能に気づきました。アニーは自分のことをわかってくれた先生と、大好きな動物や科学の話がたくさんしました。



動物の観察が好きなアニーは、動物が何におどろいたり、何をいやがったりするのかという、だれもわからないような動物の気持ちをよく知っていました。

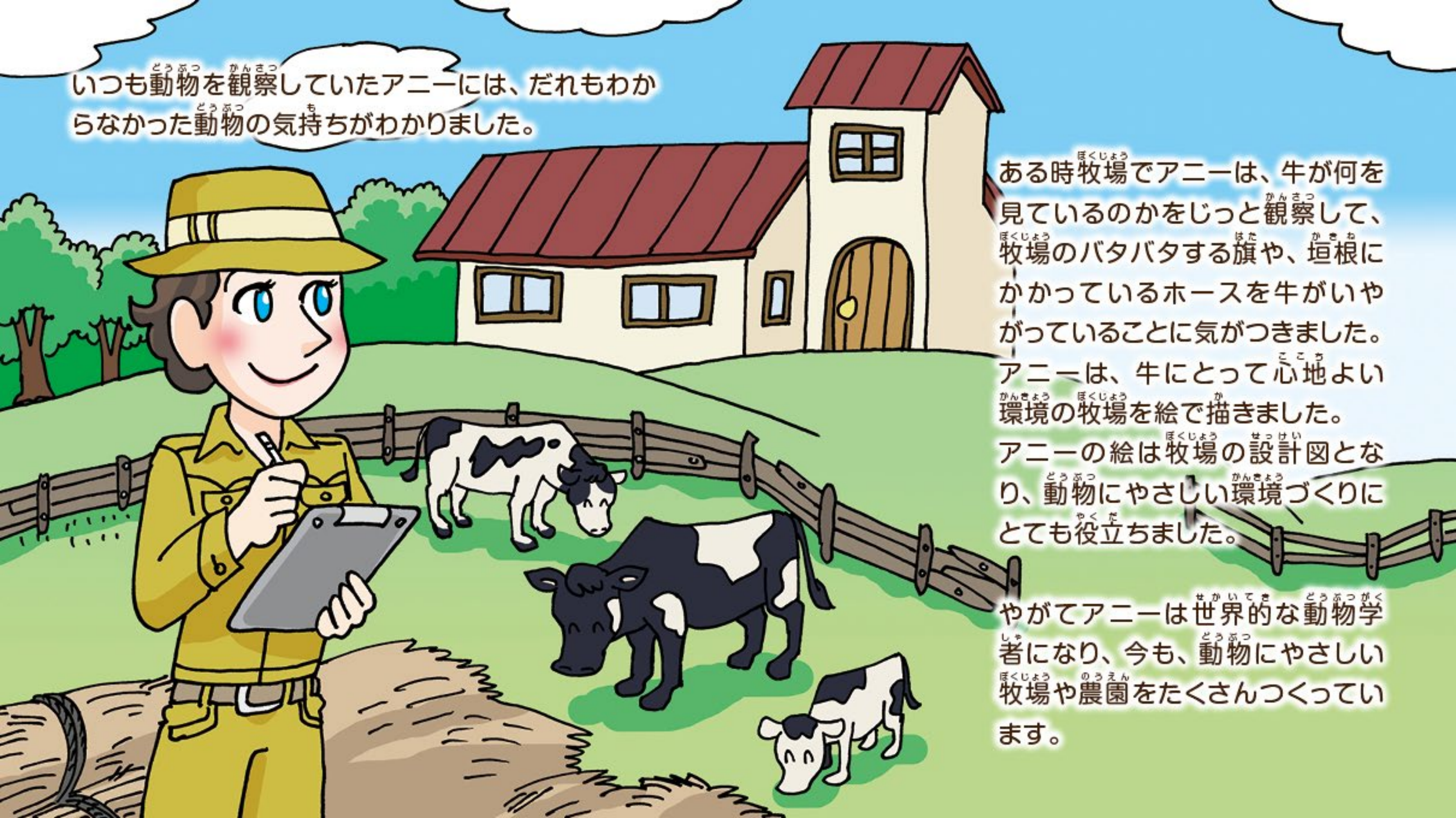
そんなアニーに、ある時先生は、大学で動物科学を勉強するようにすすめました。

「君には、素晴らしい力がある。みんなには見えないものが見えているんだ。

動物の気持ちをみんなに伝えるのが君の役目だよ。」

アニーは先生の言葉にはげまされ、
大学に進学し、
いっしょうけんめい勉強して、
ついに動物科学の
博士号をとりました。





いつも動物を観察していたアニーには、だれもわからなかった動物の気持ちがわかりました。

ある時^{ほくじょう}牧場でアニーは、牛が何を見ているのかをじっと^{かんさつ}観察して、^{ほくじょう}牧場のバタバタする旗や、垣根にかかっているホースを牛がいやがっていることに気がつきました。アニーは、牛にとって心地よい^{かんきよう}環境の牧場を絵で描きました。アニーの絵は^{ほくじょう}牧場の^{せっけい}設計図となり、動物にやさしい^{かんきよう}環境づくりにとても役立ちました。

やがてアニーは世界的な動物学^{どうぶつがく}者になり、今も、動物にやさしい^{ほくじょう}牧場や^{のうえん}農園をたくさんつくっています。

(あとかき)

この物語は、自閉症を抱えながら社会的な成功を収めた人物として知られているテンプル・グランディン(Temple Grandin)のお話を参考に作成しました。

テンプル・グランディンは、1995年に出版されたオリバー・サックス著『火星の人類学者』の主人公のモデルとなったことで世界的に有名です。

著作権の関係上、テンプル・グランディンの名前を使うことはさけ、主人公や登場人物の名前をオリジナルにしています。